

〔文徳實錄〕<sup>五</sup>仁壽三年二月甲戌治部少輔兼齋院長官從五位下藤原朝臣關雄卒、<sup>〇</sup>中關雄少習屬  
 文性好閑退常在東山舊居耽愛林泉時人呼東山進士、

〔更科日記〕あづまぢの道のはてよりもなをおくつかたにおひ出たる人、いかばかりかはあやし  
 かりけむを、いかに思ひはじめける事にか、世中にものがたりといふもの、あんなるを、いかに  
 みばやとおもひつゝ、つれづれなるひるまよゐなど、あねま、母などやうの人々の、其物語りか  
 のもの語、ひかる源氏のあるやうなど、ところへかたるをきくに、いと、ゆかしさまされど、わ  
 がおもふまゝに、そらにいかでかおほえかたらむ、いみじく心もとなきまゝに、とうしんにやく  
 し佛をつくりて、手あらひなどして、尺まにみそかにいりつゝ、京にとくあげ玉ひて、ものがたり  
 のおほく候なる、あるかぎり見せたまへと、身をすて、ぬかをつき、祈り申ほどに、十三になると  
 しのぼらんとて、九月三日かどでして、いまたちといふ所にうつる、<sup>〇</sup>中かくのみ思ひくんじた  
 るを、心もなぐさめんと、心ぐるしがりて、は、物語などもとめてみせ給ふに、げにをのづからな  
 ぐさみゆく、むらさきのゆかりをみて、つゞきのみまほしくおほゆれど、人かたらひなどもえせ  
 ず、されどいまだみやこなれぬほどにて、えみつけず、<sup>〇</sup>中いと口をしくおもひなげかるゝに、を  
 ばなる人の、おなかなよりのほりたる所に、わたいたれば、いとうつくしうおひなりにけりなど、あ  
 はれがりめづらしがりてかへるに、何をか奉らん、まめくしきものは、またなかりなむ、ゆかし  
 くし給なるものを奉らんとて、源氏の五十餘卷、ひつにいりながら、ざい中將とをきみせり、川し  
 ら、あさうづなどいふものがたりども、一ふくろとり入て、えてかへる心地のうれしさぞいみ  
 じきや、はしなくわづかに見つゝ、心もえず心もとなく思ふ源氏を、一の卷よりして、人もまじら  
 ず、木丁のうちに打ふして、ひきいでつゝ、みる心地、きさきのくらゐもなにかはせむ、ひるは日暮  
 し、よるはめのさめたるかぎり、火をちかくともして、是を見るよりほかの事なければ、をのづか